

和泉式部像の変容

——説話からのまなざし

遠田 晤良

(文化学部教授)

はじめに

紫式部と和泉式部が互いに「おもしろう書きかはし」合う親しい間柄であったことは紫式部の日記によってよく知られている。その紫式部が、和泉式部の歌才に関して「口にまかせたることどもに、かならずをかしきひとふしの、目にとまるよみそへはべり」と即詠の才を評価した。それにもかかわらず「はづかしげの歌よみやとはおほえはべらず」と結ぶのは、「歌よみとて、よろづのことにつけて詠みちらさねど、聞こえたるかぎりは、はかなきをりふしのことも、それこそはづかしき口つきにはべれ」という赤染衛門にくらべて一段劣るものと見ていた、紫式部の保守的な和歌観を垣間見せる。それは個人的な批評であったが、同時代の評価として後世にきわめて重い意味

を持った。

それと同時に「されど、和泉はけしからぬ方こそあれ」と付け加えずにはいられなかった、和泉式部の素行に関する証言もきわめて重いものだった。道長が揶揄して「浮かれ女の扇」と戯れ書きした事と相俟って、「浮かれ女」和泉式部像の形成に大きな役割を果たした。

和泉式部はその時代には、芳しくない噂によって圧倒的な歌才までもが相殺されかねない憾があったが、時を経るにつれて、歌そのものの輝きが人々の心に深くしみ込んでいった。

和泉式部の歌は、今日に伝わる正集・続集・宸翰本・松井本併せて千九百首ほどであるが、重複するものを除いても約千五百首ほどになる。拾遺集以下の勅撰集に二百四十八首という圧倒的な数の入集歌を持つ。その事実が物語るように、和泉式部は後拾遺集以降、後世においていっそうその歌が共感され、歌人として高い評価が与えられた。

鴨長明は、大納言藤原公任が評した赤染衛門と和泉式部の代表歌に疑問を抱き、さらに「無名抄」の中で、

式部・赤染が勝劣は、大納言一人定められたるにもあらず。世こそぞりて式部を優れたりと思へり。しかれど人のしわざは、主のある世には、其人がらによりて劣り勝る事あり。歌の方は式部左右なき上手なれども、身のふるまひもてなし、心持ちなど、赤染には及び難かりけるにや、(略)其時は人ざまにもち消たれて、歌の方にも思ふほど用いられねど、真には上手なれば、秀歌も多く、ことに触れつつよみ置く程に、撰集共にもあまた入れるにこそ。

と記した。長明は「身のふるまひもてなし」に影響されず、歌そのものを評価する態度を明確にしている。和泉式部が生きた時代から、二百年が経っている。

和泉式部への関心は現代に於いてもきわめて強いものがある。詩人和泉式部の魂の中に、現代の人々の心を惹きつけるものが確実に存在する。しかしながら、同時代の人々が同じ世界にあったが故に「人さまにもち消たれて」必ずしも正当に評価し得なかつたその歌の真実を、現代の人がまっすぐに受け止めているであろうか。時を経てよけいなものが洗い流され、歌そのものに対峙しているはずの現代人が、むしろ和泉式部の「けしからぬ」振る舞い、「浮かれ女」との証言に幻惑された歌人像を先入観として、放恣な歌の受け止め方をしているのではなからうか。

説話の世界に形成された和泉式部像は、和泉式部の実伝の形成には全く問題にならないものであるが、それをも敢えて視野に入れて、後世の受容の様子を振り返ることによって、和泉式部の歌に新たに見えてくるものがあるように思われる。

一 黒髪の乱れ

黒髪のみだれも知らずうちふせばまづかきやりし人ぞこひしき

後拾遺集恋三（和泉式部集八六）所収の、和泉式部の代表歌のひとつである。

乱れ髪の官能的なイメージが強烈で、恋の情念の狂おしさをも感じさせる歌である。

この歌は、「打ち臥す」時と「かきやりし」時の時間の問題、「まづ」が「かきやりし」に直接かかるのか、「こひしき」にかかるのか等、解釈にいくつかの揺れが許容されるのだが、かつて寺田透氏は「この歌は、何かの悲しみにくれて打ち臥す自分を慰めてくれた男を歌ったものでは決してない」といい、「かの女の黒髪のみだれは、房事のはげしさがもたらしたものであり、かの女は自失の状態で自分の髪の毛にくるまれて倒れているのだ。そしてそれがつねのことで男の方が早くわれに帰る。そしてかの女の髪の毛を、かきやる、というのは単純に掻き撫でるのではなくありえないだろう。思いやる、思いやるという熟語動詞におけるのと同じように「やる」という動詞がついている以上、乱れてかの女の顔をかくしていた髪の毛を、向こうへ押しやるように掻きあげて、そうしてかの女の顔をのぞきこむようにした男が恋しいとこの歌は歌っているものであり、かの女が恋しているのは自分の肉体の征服者としての男なのだと断定してさしつかえないはずである」と^{*2}と解釈した。

その解釈のように、「自失の状態で自分の髪の毛にくるまれていたのだとすれば、「黒髪の乱れも知らずうちふすのは、「恋しき」と思っている今ではなく、房事のことであり、そのとき髪の毛を優しく掻きやって、顔をのぞきこむようにした男が今は恋しいと歌っているのだということになる。

こうした解釈に対し、森重敏氏は『かきやる』のその用いられる場面が、情事そのものではないことを知らず、いたづらに心を動して妄想したものである」と^{*3}と異を唱えている。

寺田氏の評論が、和泉式部の意識下の世界にまでメスを入れ、なまなましい女の肉体と魂の相克を抉摘し、式部の人間存在の深部に光を当てたものであることは高く評価されている。その鋭く深い洞察は和泉式部像に明確な輪郭を与え、それが和泉式部研究に与えた影響はきわめて大きいものがある。

しかし、この歌が「房事」の様を詠み込んだ歌であるとする解釈は、寺田氏の表現でいえば、和泉式部の「異常に性的な資質」を先入観とするものであり、森重氏の批判のごとく、あまりに放恣な現代的な解釈といわねばならない。さらには、こうした解釈が和泉式部の愛欲の歌人としてのイメージを肥大させてきたといっている。

「かの女は自失の状態で自分の髪の毛にくるまれて倒れているのだ」というように寺田氏のイメージは「黒髪のみだれ」に誘引されたものであることは明らかである。しかし、森重氏が「上句の『くろかみ』のみだれ』は、今ひとりひそかに『うちふし』てのものであるが、下句への続け柄としては、その『くろかみ』からみぎのやうな意味で二人が逢ったときの自分の『くろかみ』へと、自然につながるものになってゐる。そこにもこの一首の表現の優れた点がある。また、今のこの『みだれ』た『くろかみ』は男と逢ったときのものと勿論同じ和泉自身の其れであるにしても、今のは遠く男を思つてのひとりの髪であり、『かきやりし』の髪は、思ひ出のなかの、男と逢ったときのものである。今のなかに、かつてのものが遠くながめられてゐる形になつてゐるといふありかたも、一首の心の『こひし』さの表現として優れた自然さをもつてゐる」というように解するのが妥当である。

古代の和歌において「黒髪の乱れ」は、恋する女の心の乱れを表すものとして詠まれてきた。

ぬばたまの我が黒髪を引きぬらし乱れてさらに恋ひわたるかも（万葉 二六一〇）

題知らず

躬恒

朝なあさなげつればいとど乱れつつ我が黒髪のとけぬ比かな（新拾遺 恋三）

待賢門院堀川

ながからん心もしらず黒髪のみだれてけさはものをこそ思へ（千載 恋三）

頼政

わぎもこがもすそになびく黒髪のながくやものを思ひみだれん（頼政集 三九九）

黒髪は女の肉体の一部であり、肉体そのものであるが、万葉以来の和歌の世界では、恋の心のもつれを嘆き、長さにかけて男の心の長からんことを願うものとして詠まれてきた。「黒髪の乱れ」はもの思う心の激しさの表現であり、妖しく思い乱れる女の情念の表現である。その黒髪を「かきやりし人」だが、「かきやる」は「かき撫づ」と異なり愛撫の意味はない。顔にかかる髪を搔くようにして、後ろの方に撥ねるようにする行為をさす。

新大系「後拾遺集」は、和泉のこの歌の「まづかきやりし」の注記に「初めて共寝をして起きた時に搔きやって私の顔を見た人。最初の恋人」として、源氏物語「夕霧」の巻の左の一節を引いている。いわゆる初恋説をとっているのだがそれは措いて、源氏物語の引用箇所は今日的に言えば、まさに男が女の「肉体を征服」する場面である。

- ① 「うちは暗き心ちすれど、朝日さし出でたるけはひ漏り来たるに、埋もれたる御衣ひきやり、いとうたて乱れたる御髪かきやりなどして、ほの見たてまつり給ふ。」

夕霧との結婚を逃れて塗籠に籠もった喪服の落葉の宮を、小少将の手引きで追いつめた夕霧が無理強いに思いを遂げる。「うたて乱れたる」二の宮の「御髪」は夕霧を拒み御衣を頭からひき被っていたからであるが、さながら思

い詰めた落葉の宮の苦しい心の乱れを物語っている。「御衣ひきやり」「御髪かきや」る行為は、独りよがりの恋に陶酔した男が不器用ないたわりをこめて顔をのぞき込む行為だが、新たな哀しみに身を振る女の心からはほど遠い。しかしながら、塗籠のうす暗がりの中では、一見心通わした恋人のしぐさに見えるのも皮肉である。

源氏物語のこの箇所は、独善的な男の欲望と二の宮の女の悲哀を語る場面なのだが、「肉体の征服」はきわめて曖昧に臙化されて、男の目に映る二の宮の気品高い容貌に描写は移る。源氏物語の他の場面と同様、時の移ろいに実事が暗示されるきわめて抑制された表現、臙化された表現が注意される。源氏物語には表現すべきことと表現せざるべきこととの区別がはっきり存在する。

物語世界のこうした表現法にたいして、恋の歌の世界は散文の世界のタブーとは異なるものの、いつそう抑制的であるのが普通である。また、源氏物語の中の「かきやる」例のほとんどが、女に言い寄る男の誠意を訴える場面であるのに、夕霧が強引に思いを遂げるこの場面を、新大系が注記として引用例示するところに、寺田氏の和泉式部歌の解釈が強く作用しているように思われる。

他に源氏物語に「かきやる」の例を求めれば、

② 夜がれを重ねる源氏と権斎院との噂に悩む紫の上を源氏が慰める場面、

「あやしく例ならぬ御けしきこそ心得がたけれとて、御髪をかきやりつつ、いとほしとおぼしたるさまも、絵に描かまほしき御あはひなり」(朝顔^{*})

③ 源氏が物語にかこつけて玉鬘に言い寄る場面、

『思ひあまり昔のあとをたづぬれど親にそむける子ぞたぐひなき

不孝なるは仏の道にもいみじくこそ言ひたれ』とのたまへど、顔ももたげたまはねば、御髪をかきやりつつ、いみじく怨みたまへば、」（蛭）

④ 宇治に泊まった薫が喪服姿の大君に迫る場面、

「心にくきほどなる火影に、御髪のこぼれかかりたるをかきやりつつ見たまへば、人の御けはひ、思ふやうにかをりをかしげなり。」（総角）

⑤ 失意の薫が大君の亡骸を抱く場面、

「御殿油を近うかかけて見たてまつりたまふに、隠したまふ顔も、ただ寝たまへるやうにて……
御髪をかきやるに、さと匂ひたる、ただありしなごらの匂ひに、なつかしう香ばしきも、ありがたう」

（総角）

「かきやる」動作は、恋する男が思いを込めて、思いやりや優しさを示す場面で有効な表現となっている。和泉式部が肉体の征服者を想起するのであってもかまわないが、「恋しい」と求めているのは、いたわりや優しさを見せてくれた、男のひたむきな恋する心なのである。「かきやる」という動作を示すありふれた語が歌の世界に取り込まれることは和泉式部以前にほとんど見られないのであるが、和泉式部のこの歌によって男の優しさや、思い詰めたひ

たむきなまなざしを象徴する歌の言葉になっている。

「もの思うあまり黒髪の乱れるのもかまわずに打ち臥すと、この黒髪をやさしくかきやってくれ、切なく私を見つめたあの人が思い出され、何をさておいても無性にあの人が恋しくてならない」と帰るすべない悔恨をにじませた初恋の人への憧憬と解することが、必ずしも歌のイメージを貧しくするものではないであろう。

後に藤原定家がこの歌を本歌に

題しらず

定家朝臣

かきやりしその黒髪のすぢごとにうちふすほどは面影ぞたつ（新古今集 恋五^{*5}）

と詠んだことはよく知られているが、女の面影を追う独り寝の男の展転する恋の嘆きを表現して、和泉詠に対する共感と理解を示している。

二 後拾遺集と和泉式部

「後拾遺集」は応徳三年（一〇八六）に撰進された。和泉式部の没年を長元末年（一〇三七）とする通説にしたがえば、死後約五十年頃の成立である。和泉式部は六十七首入集という最高の位置を占めた。撰者藤原通俊の和泉式部評価というにとどまらず、この時代の人々の和泉式部の歌に対する評価を示している。

その「後拾遺集」巻二十、雑六神祇の部に、周知の次の歌がある。ただし、この歌は和泉式部集、続集いずれにも見られない歌である。宸翰本と松井本和泉式部集にはあるが、宸翰本は後拾遺集を素材にしており、松井本は宸翰本を増補したものであろうと考えられている。また、説話として、「俊頼髓脳」「袋草紙」「無名草子」「十訓抄」「古今著聞集」にあるが内容的にはほぼ同じである。

男に忘れて侍ける頃、貴布祢にまゐりて、御手洗川に

蛍の飛び侍けるを見てよめる

和泉式部

もの思へば沢のほたるもわが身よりあくがれ出づるたまかとぞ見る

御返し

奥山にたぎりておつる滝つ瀬のたまちる許ものな思ひそ

この歌は貴船の明神の御返しなり、男の声にて和泉式部が耳に
聞えけるとなんいひ伝へたる

この歌を「俊頼髓脳」では、「男」が保昌であるということとともに、「御返し」が式部の耳に聞こえたこと、式部自身が語ったものとしている。

「男に忘られて」は男の心が離れてしまったことをいい、「もの思へば」はもちろん恋の懊悩である。

先の「黒髪の」歌にも関わることであるが、式部は神をも感動させるほど「魂ちるばかり」に「もの思ふ」人で

あつた。もの思う心の深さが神意をも動かしたと人々に信じられていたことが重要である。「もの思ふ」ことを歌語に含み持つ歌は、和泉式部集に実に多く存在する。

物思へば雲おにみゆる雁がねの耳にちかくも聞ゆなるかな 一三八

もの思へば我か人かの心にもこれとこれとぞしるくみえける 二一〇

花咲かぬ谷の底にも住まなくに深くも物を思はるかな 四四二

ものをのみみだれてぞ思ふ誰にかは今はなげかんむばたまのすぢ 九七四

もの思ふにあはれなるかと我ならぬ人にこよひの月をみせばや 一三三一

物思へばしづ心なきよの中にのどかにもふる雨のうちかな 一四九七

人知れずもの思ふことはならひにき花にわかぬ春しなければ 一六八二

千葉千鶴子氏は和泉の遊離魂の身体的状況、心理的情態を分析しているが、その対象として「物おもふ」歌四十八首をあげているほどである。^{*}

続集末尾が

ありはてぬいのちまつまの程ばかりいとかく物をおもはずもがな

という歌で結ばれていることは、意味深い。

男の心がすっかり離れてしまったことに悩んでいたある日、貴船神社に詣でて、宵闇の御手洗川のほとりに飛ぶ蛩を見て詠んだというこの歌は、肉体から彷徨い出る魂を視覚化した歌であるとされ、遊離魂の信仰を前提にして解釈されるのが普通である。

新大系「後拾遺和歌集」の注は、

「あくがれ出づるたま 身体から離れ、さまよい出る魂。『思ひあまり出でにしたまのあるならむ夜深く見えば魂結びせよ（伊勢物語 一一〇段）、

もの思ふ人の魂はげにあくがるものになむありけるとなつかしげに言ひて、嘆きわび空に乱るるわがたまを結びとどめよしたがひのつま（源氏物語・葵）」
をあげる。

この時代は、女たちの身と心の二元的な分離相克の嘆きが著しく深まりを見せる時である。「己が身の己が心にかなはぬ」といい「憂き身を知らぬ心」という身と心の対立は和泉において多様であるが、増田繁夫氏のいうごとく「『身』と『心』の対立というのは、和泉に限らず、この時代の人々の、自己を対象化して認識する場合に用いられる概念である。特に自我が伸張してきたこの時代になると、自己の所与としての側面の『身』と、それにあまじることができずに、『身』を超えようとしてもがき傷つく『心』の対立という形で、自己を意識するのが一般的になっていた^{*}」のである。

身と心は本来即時的に一体化しながら存在のアイデンティティーを支えているべきものである。閉塞的な社会と一夫多妻の男女関係の中で女たちが引き受けねばならなかった状況の重みが、彼女らに身と心の分裂相克を認識させ、

その分裂自体が哀しみや嘆きの言葉として表出される。遊離魂の俗信もこうした時代のなかで、源氏物語のように新たなリアリティーを獲得していったことであろう。

和泉の歌には魂結びの習俗が念じられているわけではないが、草間に明滅する螢火を息をのんで凝視する心には、理性ではいかんともしがたい情念の奔騰への怖れや怯えとともに、魂の信仰が露呈している。森重敏氏はこの歌には、「『遊離魂』の信仰はあるが、『魂結び』の習俗のことは直接思はれてゐない」ことに関して、「ひたすら『遊離』——『あくがれいづる』おのれの恋の『ものおもひ』の心を、それに自身釘付けされるやうに、息をのんで凝視する心をいつている。和泉は、われながら、語の原義において、また転義においてさへも、自身如何とも出来ないあさましい心のなかの『もの』の動きを注視しながら、かつは戦き、かつはもて余すやうに歎いてゐる。心の内へ向ひ、外の習俗など忘れてゐるこの境地は、恋の歎きとしてすこぶる注意すべきものである^{*}」と指摘している。傾聴すべきものがある。

しかし、「心の内へ向かひ、外の習俗など忘れてゐるこの境地」といわれている点には、なお補足が必要であろう。「心の内へ向か」う激しい恋情が内なる呪術的な感性をよみがえらせ、古代的な魂の信仰を呼び覚ますという、和泉の歌の特性がここにあつて、人々の心を激しく揺さぶるのである。

勅撰集における「神祇」の部立ては、後拾遺集の雑部において小部立てとしてはじめて立てられ、千載集以降中世の勅撰集の部立てとして定着していく。後拾遺集の小部立ては古今集卷二十の「神遊び歌」や拾遺集卷十の「神楽歌」に見られる部類意識を承けたものである。しかし後拾遺集では、神楽歌のような歌謡的なものは除かれて託宣、感応の歌や、神事の歌、神社行幸参詣の歌によって構成されている。時代の信仰の有り様を反映したものである。

和泉式部のこの歌は「もの思へば」の歌に感応した貴船明神の神詠の故に、神祇の部に採歌されたものであろう。「もの思へば」の歌が宸翰本、松井本にはあるものの、正集・続集いずれにも入っていない歌であることが不審である。伝承歌が和泉式部に仮託された可能性もないわけではない。しかし、なによりもこの歌が和泉式部の歌らしい性格を十分にそなえていることも事実である。勅撰集にこうした形で採歌されるには、「もの思へば」の歌が和泉式部の歌として広く伝播し、すでにこの歌をめぐる歌語りが形成されていたのであろう。歌論書や説話集にほぼ同じ歌徳説話のかたちで取り上げられていることは、後拾遺集の段階で説話としてのかたちがすでにできあがっていたものと考えていい。

歌語りの担い手たちは、和泉の「もの思ふ」心の深さに共感を抱くとともに、この歌に神意を動かす古代的な呪術性を感じ取っていたのである。和泉式部の歌に潜在し、直接魂に語りかけてくる古代和歌的性格が歌語りを引き出す要素であり、数々の説話を生み出す重要な要素である。いずれにしても注意されることは、和泉の歌に感応して神が返歌をしたと信じるに至る、和泉の歌の古代的な性格である。

その後の和泉式部説話のおびただしい数は、人々の和泉に対する関心や憧憬の強さを物語るが、それらの説話は歌徳説話に類するものから、時代を下るにしたがってしだいに好色に関わるものに傾斜していく様が見て取れる。「宇治拾遺物語」「古事談」「古今著聞集」「沙石集」「雑談集」に見られる道命法師と和泉式部との情話を語るそうした説話が、「お伽草子」の荒唐無稽な母子相姦譚にまで発展していくのである。

こうした俗伝が実在の歌人和泉式部と何ら関わるものではないはずである。しかし、いつしか実伝に紛れ込み、式部像の形成に投影し、さらには歌の受容にも先入観を与えていると考えられる。

三 和泉式部の説話

情熱の歌人、愛欲の歌人と言われる和泉式部は、後世において小野小町、西行と並んで伝説化・説話化されることのもっとも多かった歌人である。西行は歌僧といわれるように、一般の歌人とも僧とも違う特異な生涯が、歌道仏道両面から関心を集めた。中世の男性である西行は別にして、平安朝の女性歌人である小町・和泉の伝説には多くの共通点がある。

小町説話は、「十訓抄」第二、「古今著聞集」巻五にあるように、壮衰を述べるものが主流をなしているが、「玉造小町子壮衰書」の内容が小町という名の一致によって、いつしか小町伝として混同されていったものとされている。小町説話を構成する伝説的要素は、「好色、驕慢な態度、孤寡、貧窮、流浪、和歌の詠作、著名歌人との関わり」^{*10}である。これらの要素が組み合わされて説話が成立しているのであるが、伝説の中では小町と和泉式部は交換可能な人格のようにしばしば混同される。

例えば、小町が悪疾にかかって薬師如来に祈願するが、効験がないので、

南無薬師諸病悉除の願立てて身より仏の名こそ惜しけれ

と恨み言を歌にしたところ、薬師如来が答えて、

村雨はただひとときのものぞかしおのが蓑笠そこにぬぎおけ

と返歌したという。その声が聞こえるやいなや宿痾はたちまち平癒したと伝える。この奇蹟譚の主人公が、時に和

泉式部でもある。^{*11}

和泉式部の説話は、『古事談』『宇治拾遺物語』『十訓抄』『古今著聞集』『宝物集』『沙石集』など、中世の多くの説話集に掲げられている。その他にもお伽草子や謡曲にも及んでいる。^{*12} また、説話をはじめ草子や謡曲などの文芸的作品の他に各地に伝わる伝説も実におびただしいものがある。

吉田幸一氏によつてこれまで伝説説話の類が調査報告されてきているが、それらの和泉式部説話を、氏は日本古典文学大辞典^{*13}に次のように分類している。

- (一) 名歌の評論
- (二) 歌による小式部との母子説話
- (三) 阿闍梨道命との情事を語る説話
- (四) 橘保昌の一子道命と遊女和泉式部との荒唐無稽な母子相姦譚
- (五) 御法の教えを乞うて書写山の性空上人を尋ね「闇きより闇き道にぞ」の歌を贈る書写山参詣説話と一念発起の持戒清浄の尼僧説話
- (六) 歌徳説話
- (七) 田舎出身の和泉式部出世譚
- (八) 式部の鹿の子伝説^{*14}

氏は、「さらに、中世・近世期には和泉式部の生誕地・墳墓・供養塔・歌塚などと称する古跡が全国諸方に存在し、

それになつたる回国遊行の歌比丘尼の伝説が伝承されている。それらは、歌占の和泉式部伝説と共に、平安女流歌人和泉式部に名を借りた、民間信仰によるものと見られている。」と述べている。

和泉式部は類い希な美貌の女房であり、多くの恋の歌を残し、当意即妙な歌によって男性に対抗し、女性のあこがれを刺激する存在であったから、その波乱に富んだ生涯への関心が民俗信仰と結びつきながら、数々の伝説を生み出し説話化されてきた。

和泉式部伝説が民間信仰と結び派生していく原理は、早く柳田国男の調査によって明らかにされてきたところである。^{*15} 柳田は和泉式部伝説の唱道者、伝播者は泉や川などの水辺で宗教行為をしながら回国遊行した巫女・歌比丘尼とみなした。中世において全国的規模で流布していった軌跡は「讚仏乗の因縁ともなるべき、珍しい言葉物語を運ぶことを主としていた」歌比丘尼である^{*16}とみなし、「少なくとも和泉式部に関する近代の雑説だけは誓願寺が本元であった」と、京都誓願寺が発信源であるとの仮説を提示した。

そうした説話の中で注意されるのは、古今著聞集^{*17}が載せる次の話である。

和泉式部のびて稻荷へまゐりけるに、田中明神の程にて時雨のしけるに、いかがすべきと思けるに、田かりける童の、あをといふ物をかりてきてまゐりにけり。下向の程にはれにければ、此あを、かへしとらせてけり。さて次の日、式部はしのかたをみいだしてゐたりけるに、大やかなる童の、文もちてたゞみければ、「あれはなに物ぞ」といへば、「この御ふみまるらせ候はん」といひて、さしおきたるを、ひろげて見れば

しぐれするいなりの山のもみぢ葉は青かりしより思ひそめてき

とかきたりけり。式部あはれと思て、このわらはをよびて、「おくへ」といひて、よびいけるとなむ。

(巻第五 二〇一 和泉式部田刈る童に襖を借る事並びに同童式部に歌を贈る事)

この説話も一見、好色な和泉式部像を語る説話のように見える。少年の性の渴きを満たす色好みの女房という図式で、一種みだりがましい俗信の濁りに染まっているようである。

また、保元二年(一一五七)頃の成立とされる「袋草紙」も賤夫歌として「しぐれする」の歌を掲げ、この話を載せる。「田刈りける童」が「牛飼童」になっているなど小異あるものの、清輔は「但、閭巷物語難信受事歟」という結語を添えている。当時の知識人にはすでに素直には信じがたいものであったようである。

しかし、柳田国男は、この説話の「話の要点は丸きり此外の部分に在った」のであるという。「私の想像では、歌を詠んだによって始めて若者の非凡さが現はれたといふ所が、夙くから此系統の民間説話の、要素ではなかつたかと思ふのであります。」といい、年少者が歌を詠むことは、そのものの非凡、さらには神に近い清らかさとみなす風が日本の民俗の伝統にあったことをいう。「是が日本の和歌といふものの、独り文学の歴史としてばかり、考へて居ることの出来ぬ理由であります。和歌の用途はもつと広がった。人が自分の普通の者では無いこと、即ち神に憑よられて居る清き者であることを示すにも、歌を口ずさむのが一番有効な方法でありました。」とも述べている。柳田はこの説話の「童」が文字通り「神童」であり、その歌が神詠に等しいというのである。

柳田のいうように、この説話で注意されるのは、和泉式部に歌を詠みかける若者が「童」とされていることである。「童」は和名抄に「未冠之称也」とあるように、普通は元服前の姿を総称したものであった。元服前の未成年者

を「童」と呼ぶのは髪の毛の型からの命名であるといい、髪を肩まで下げたオカツパ姿をさしているといわれる。^{*18}成人と未成年者との区別は、その髪の毛の型によるのであり、このように「童」に関して髪の毛が重視されるのは、もともと髪の毛には呪力があると考えられ、髪の毛が神聖視されていたことによる。そのため神に仕える者は髪に刃物を当てることを禁忌とし、髪を切らずに垂髪にしていた。それは「童」と同じ姿をとっているのであり、童姿のもこそ最も神に近づき得る者だったのである。

「童姿が神に最も近づき得る存在であったということは逆にまた、神が童姿をもってこの世に出現してくると観想してくることもなる^{*19}」というように、神が小童の姿をもってこの世に出現するという例は、昔話、民間説話の世界ではきわめて多い。柳田が「小さ子」物語と名付けたが、神が霊童あるいは童神でこの世に出現し、人々に何らかの福德をもたらすという話である。

そうした民間の俗信がこの説話の背景にも生きていとすれば、この説話の「田かりける童」こそ田中明神の化身にほかならない。和泉式部の行為は神との交流であり、神婚ともいえるべきものと解されるのである。後拾遺集の「も思へば」の歌に貴船の神が感応したとする歌語りと同質の心が働いているのが認められる。

四 結び

鎌倉期を中心として室町期に至るまでの約二百年間、数多くの説話集が編まれた。中世におけるこのような説話興隆の背景には、保元・平治・治承の乱をはじめとする数々の戦乱、それを通して権力や経済力が衰退した貴族に

代わって、地方武士階級が興隆するなど、政治社会体制の転換が人々の心に大きな不安動揺をあたえたことが考えられる。人々はこの大きな変革期に、末世の到来を目の当たりにする思いで、生活の指針やよりどころを求めて混乱した。このような時期にもともと教訓的啓蒙的性格や仏教への教化意識を持った説話が生活の指針を与えるものとして歓迎され、時代の空気のなかで教訓的性格、教化意識をより強めていったことは容易に想像される。

和泉式部に関する説話もほとんどがそうした説話編者の意図のもとに再編成されたものである。柳田国男が指摘したような、説話が担った本来の意味をすでに見失なった奇矯な物語も多い。とうてい和泉式部の歌とは認められない歌をともしたものもある。

しかし、そこには歌のもつ神秘的な力への無条件な信頼があるのも事実である。和歌の文芸性を追求するあまり和泉式部を近代人とする愚をさけるためにも、和泉式部とその歌が、説話を生み出す力を内在させていることの意味をもっと考えて見なければならぬ。そのために和泉式部没後まもなく和泉の歌を語り継いだ人々の意識に、さらに中世の人々が和泉式部像にそそいだまなざしに潜むものにいささか思いをめぐらしてみた。

注

- * 1 『歌論集 能楽論集』日本古典文学大系 岩波書店による。公任の和泉・赤染評は源俊頼「俊頼髓脳」、藤原清輔「袋草子」が記載するところである。
- * 2 『和泉式部』日本詩人選8 筑摩書房 昭和四十六年
- * 3 『八代集選入和泉式部和歌抄稿』和泉書院 平成元年
- * 4 本文引用は「日本古典集成 源氏物語」新潮社
- * 5 田中裕・赤瀬信吾校注『新古今和歌集』「新日本古典文学大系」11 岩波書店
- * 6 本文引用は久保田淳・平田喜信校注『後拾遺和歌集』「新日本古典文学大系」8 岩波書店による。
- * 7 『和泉式部の言語空間』和泉書院 一九九七年
- * 8 増田繁夫『冥き途 評伝和泉式部』世界思想社 一九八七年刊
- * 9 前掲注3参照。
- * 10 「日本伝奇伝説大事典」角川書店 昭和六十一年
- * 11 錦仁氏『浮遊する小野小町』笠間書院 平成十三年刊は、東北各地に伝わる小町病身説話を記録考察しているが、白河市小田川の伝承として、
南無薬師かけし諸願の根も切れば身より薬師の名こそ惜しけれ
村雨の雨は一時のかりの宿みのかさなればぬぎすててゆけ
という応答を紹介している。
- * 12 お伽草子には『和泉式部』と題する作品があり、『小式部』『琴腹』などという草子も、それぞれに和泉式部の事跡について語っている。また、『猿源氏草子』『十本扇』『雪女物語』なども、その一部に和泉式部の説話を取り入れている。
- 和泉式部物の謡曲としては、「東北」「誓願寺」「稲荷」「貴船」「和泉式部」「花盗人」「小式部」「鳴門」「法華竹」などを数えることができる。
- * 13 岩波書店 一九八六年刊

- *14 日本古典文学大辞典は、各項目に概略次の記述が付記されている。
- (一)には、「中古末期の『俊頼髓脳』『袋草子』、中世期『無名草子』『無名抄』等に見られ、」
- (二)には、「『十訓抄』『古今著聞集』『沙石集』などの中世説話集、お伽草子『小式部』、謡曲『小式部』などの虚構的作品や『誓願寺縁起』などにも撰取されている。」
- (三)は、「『宇治拾遺物語』『雑談集』『古事談』などの中世説話から、お伽草子『琴腹』、謡曲『道命法師』などに及ぶ。」
- (四)は、「御伽草子『和泉式部』に」
- (五)は、「『誓願寺縁起』『和泉式部縁起』に」
- (六)は、「『和歌威徳物語』『横山八幡回祿記』、謡曲『鳴門』に」
- (七)は、「『金子山光国寺縁起』『鉄焼地藏尊御縁起』に」
- (八)は、「『福泉寺由来伝記』にしるされている。」
- *15 「女性と民間伝承」『柳田国男全集6』筑摩書房 一九九八年刊による。
- *16 「和泉式部の足袋」『柳田国男全集8』筑摩書房 一九九八年刊による。
- *17 本文は、岩波書店『日本古典文学大系』による。
- *18 高崎正秀「金太郎誕生縁起」『高崎正秀著作集 第七卷』桜楓社 昭和四十六年刊
- *19 並木宏衛「神と英雄」『日本民俗研究大系』第九卷 國學院大學 平成元年刊